

レポートの書き方

化学科 皿田琢司先生と機械システム工学科 蜂谷和明先生のお二人に、レポートの書き方についてのポイントを解説して頂きましたので、参考にしてみてください。

図書館できたえよう ― 文章はスポーツだ ―

化学科 准教授 皿田 琢司

昨年暮れに図書館報の原稿を依頼された。これで2度目である。1度目は、本学と私がいずれも年男を迎えるとともにミレニアムまで重なる記念すべき年であって身に余る栄に浴したが、このたびは何の因果であろうか。昨年は私の厄年であったから、さしずめ厄払いといったところか。

与えられたテーマは「レポートの書き方」である。結論からいえば、ただか1500字程度の手な文章を読んでレポートが書けるようになれば苦労はない。本稿はあくまできっかけの一つである。

レポートをつくる場合、最も力を入れなければならないのは、与えられた課題をいかに書きやすくするかである。言い換えれば、自分の得意分野に引きつけ、本人にしか扱えない具体的題材を取り上げることである。もっとも、独断と偏見に満ちたものを書き殴ればよいわけではない。書きやすくするポイントは、少なくとも2つある。

一つは得意分野の引き出しを増やすことであり、もう一つはレポートの主題を絞り込むことである。前者は長期的、習慣的、継続的に取り組むことであり、後者は書く段階で工夫することである。

得意分野の引き出しを増やす最善の方法の一つは、出版物を読むことである。真理探究の入門期に当たる大学生に特に適しているのは新書である。新書の多くは専門分野の研究成果を一般向けに書き下ろしたものであって、自分の所属学科の学問を知る上でも有用である。主な新書には、岩波新書、講談社現代新書、ちくま新書、中公新書、平凡社新書、新潮新書、光文社新書、集英社新書などがあり、自然科学の書も多数含まれている。本を読むのは文科系学生の専売特許ではないのである。

レポートの主題を絞り込むとは、自分が最も書きやすい題材を通して意見を述べるということである。例えば「愛」という課題が与えられたとき、最も陥りやすい誤りの一つは、愛についての一般論や冗長な思索の過程のみを意味もなく垂れ流して紙を埋めてしまうことである。読み手としてはうんざりである。どこかに落ちていそうなものを拾い集めたような文章や、味も素っ気もない平板な辞書や事典のような記述ばかりを読みたいとは誰も思うまい。

一般論を書くなというのではない。多くの人が共通にもっている価値観を知っておくことはむしろ重要である。愛についての一般的な見方をほんの一部でも覆す、あるいはそこにわずかでも疑問を差し挟むような鋭い指摘が読み手をうならせる。例えば、主題を単に「愛」とするよりも、「愛は教えられるか」、「研究に注ぐ愛」、「愛の対極にあるもの」などと絞り込んだ方が書きやすいはずである。

これは、自分の意見を相対化する作業である。それができるためには、一般論を知っておく必要がある。そのために必要なトレーニングもやはり読書である。

文章を書くトレーニングはスポーツにたとえられる。自転車の本を読んでも、それだけで自転車に乗れるようにはならない。水泳選手の講義を聞いても、それだけで泳げるようにはならない。レポートをつくるのもこれと同じである。新書をはじめとして、多くの人に読まれている文章を普段から読み続ける習慣を身につけよう。新書に飽き足りなくなったら、事典類や専門書の力を借りればよい。

文章を書くことを苦手とする人は多くの場合、語彙の乏しさや表現の稚拙さをも心配する。この不安も、新書を読む習慣を通して徐々に解消する。興味をもって読み続けければ、知らず知らずのうちに違和感のない表現も身につけやすくなる。余裕があれば、レポートなどに使えそうな表現をメモすることまで習慣づけければよい。

プロの文筆家をめざすわけではない。読む文献の手がかりを新書に限定したのもそのためである。習得をめざすのは、あくまで多くの人が読んで理解できるレベルの文章なのである。